慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本人最初の印度支那半島横断(三)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.1 (1935. 4) ,p.164- 164
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	餘白錄
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350400-0164

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本人最初の印度支那半島横斷（三）

卽ち最近印度支那協會發行「會報」（一九三四年號）に高於苑三氏の「阿部仲麻呂の安南に於けると高岳親王の羅越（老撾）とに於ける傳說」と云ふ論文（未完）現はれ、また外務省調査部の發行した郡司喜一氏の「十七世紀に於ける日暹關係」（昭和九年）の中には羅越卽老撾說こそ棄ててをるが著者は之を Lopburi に比定し、暹羅南方にあててをる。氏の論據はその名稱の相似と羅越を Ligor 卽ち六昆地方に比定する說あるも六昆地方とメナム河一帶の地域とが古代に於て屢々同一帝國の治下にありしといふこと、「流沙を渡り羅越國に至り薨ず」と云ふ記事に「流沙を渡り」とある以上流沙川と何等關係ない馬來地方に比定するのは誤りで相當な大河の附近で薨じられたらしいと述べ、最近の發掘を引用して下暹羅地方が古代から東西交通の要路であつたことを論じてをる（四八七―五一一）。然しながら此の說は羅越をシンガポール海峽の北岸なりとする新唐書の文について一向觸れず、流沙を越ゆると云ふ文句は西域や印度との交通を說く場合支那人の單なる常套の句であつたと云ふ桑原博士の說に對しても別に反駁されてゐない。著者はシアムの此の時代の歷史を論ずるに缺くべからざるペリオの「交廣印度兩道考」も讀んでをらず、從つて暹を Sukhotaï 羅斛を Lopburi 丹眉流を Ligor 羅越をマレイ半島南端に比定してある同氏の說に何等觸れられてない。羅斛と羅越とは同一の支那テキスト（宋史）中に別々に列擧せられてをるのであり、郡司氏の如く之を一つに混同し、羅越卽 Lopburi 說を唱へることは避けられねばならぬ。今の所矢張り高岳親王は海路をとつて渡天せんとされ、羅越卽ちマレイ半島の南部で薨ぜられたと云ふ說が東西學者の一定した學說であつて、之を破碎せんとするには少くとも從來あげられた各說を一々檢討して新說を立ててもらはねばならぬ。一體我國に於ては俗說流行し專門學者の言說が高閣にゆだねられ、一般讀書階級の間に普及しない傾向あるのは遺憾である。少くとも國際場裡に活躍する有識階級の如きは今少し我が國及び諸外國の一流東洋學者の到達してをる定說位ひには平素から理解をもつて貰ひたいものである（松本信廣）。